

地域資源を活かす！ 合力のまちづくり

くうみ・やま・こころきざきり

佐田岬半島は活きている！



佐田岬
地域づくり団体連絡会
代表
塩崎 満雄

はじめに

急峻な地形から難所が多く、かつて秘境と言われた日本一細長い半島「佐田岬半島」に、半島の尾根を縦走する頂上線（通称・メロデューライン）が開通して20年。三崎町、瀬戸町、伊方町の3町が合併し、平成17



行政との連携不足や、他団体との意思疎通が円滑に進まないなど、行政区域の広域化によるマイナスイ面が浮き彫りにされてきました。この厳しい現状を何とかしようとして、平成18年度

に民間主導型の「佐田岬ツーリズム協会」が設立され、本格的な活動を開始しました。観光情報の発信はもちろん、地域住民と協働し、佐田岬に眠っている地域資源を掘り起こし、他にはない「佐田岬ブランド」に育てようと、地域密着型のまちづくりに取り組んでいるところであります。今後とも本町の地域づくり活動における中核的組織としての役割が期待されています。

とりわけ、地域づくり活動の分野に与えた影響は大きく、合併当初から各団体が戸惑いをもって活動をしている状態で、

また、「協会」の設立を好機ととらえ、これまで旧町単位で独自に活動を展開してきた地域づくり活動団体同士が、情報

交換や交流を図り、良い意味で競い合いながら、横の連携を深めていくことを通して町を活性化させようと、町内の様々な地域づくり活動団体の連合体として「佐田岬半島地域づくり団体連絡会（以下、連絡会）」が組織されました。

連絡会の合言葉は「合力」です。

合力とは奉仕精神のことで、当地区では「根限り」とも言われ、「参加した以上は、最善を尽くす」という意味で用いられています。

愛媛大会では、そんな合力の精神で設立された私たちの団体が、現在取り組んでいる様々な地域づくり活動を、全国に向けて発信したいと思えます。



先人の匠保存に取り組む若者達



佐田岬灯台



愛媛大会に向けての取り組み

連絡会が主管する分科会では、「美食」「美景」「美談」という「3大美」をテーマに、連絡会を構成する各団体が担当して、次のような活動報告を行う予定で

- ① 景観保存活動としての石垣づくり
さががけ橋塾 塾長 増田 克仁
- ② 生活文化のリサイクル美装活動
裂織り保存会 代表 小林 文夫
- ③ ふれあいと体験美食の小ト口鍋実践食
豊の浦漁港婦人部 代表 福島 カヨミ
- ④ ふるさと田舎の味おふくろの味を商品化
瀬戸農産物加工組合 代表 井上 玲子
- ⑤ 日本一の清見タンゴールゼリーを
世界市場に
はるみグループ 代表 山田 公恵
- ⑥ 特産品を高級化する女性パティシエ
ペーカリー入船 内山 智恵
- ⑦ 地域資源を活かした地域活性化
佐田岬ツーリズム協会 主任 高月 芳人

このような活動報告を通して、これまであまり知られていなかった、各地区に埋もれている自然、歴史、特産品といった地域資源に光をあて、地域ブランドに育てていこうと、スタッフが日夜知恵を出し合いながら、11月の愛媛大会に向け

て準備を進めているところです。

第6分科会のアピールポイント

「美食」「美景」「美談」という「3大美」をテーマにした分科会は、第6分科会だけです。

伊方町を訪れて良かったと実感できるのは、何といっても「食する欲（＝美食）」が満たされたときではないでしょうか。

関アジ、関サバと同じ漁場で捕れる鮮魚は、「岬アジ」、「岬サバ」と呼ばれ、豊後水道の潮流にもまれて引き締まったその身は、他の産地の魚とは一線を画する美味として有名です。

今は亡き、木村尚三郎東京大学名誉教授が、退職記念旅行に奥さんと佐田岬半



昨年開催された資源開発フォーラムの様子

島を訪れ、海の幸を満喫された感想を「竜宮城にきたようです」と表現されました。

この「竜宮城」という言葉には、海の幸を味わったことに対する評価とともに、「美しい風景（＝美景）」も含まれていることは言うまでもありません。

そして最後の「美談」では、大分県「豊後・大山 ひびきの郷」から緒方英雄総支配人を、そして本県の伊予市双海町「人間牧場」から、若松進一牧場主の両名をゲストとして招き、これからの地域づくりのあり方についてアドバイスをいただく予定としております。

私たちの分科会では、こうした「3大美」を通じた地域づくりについて、県内外の方々と熱く語り合いと思えます。また、参加された方々が有意義な分科会だったと感じてもらえるよう、スタッフ一同「合力」の精神をもって、精一杯努めさせていただきます。

皆様、竜宮城の佐田岬半島、伊方町に是非お越しください。



小ト口鍋体験に感動